

話すこととのむことの相互行為分析

——マルチアクティビティの観点から——

團 康晃

本論では、読書会における嗜好品摂取を対象に、特に議論の進行と嗜好品摂取の関係について、エスノメソドロジー・会話分析におけるマルチアクティビティの観点から明らかにする。そこでは、会話と嗜好品摂取活動とが互いにその進行を阻害しない幾つかの方法が観察された。一つには他者の順番内で嗜好品摂取を行うこと。もう一つには、自分の順番において嗜好品摂取活動を始めることで、自らの順番の完了を予示する機能である。

1 はじめに

私たちは生活の様々な場面で飲食をしている。それは生命の維持のために必要な食事であったり、生命維持のためには特に必要のない嗜好品の摂取であったり、様々なバリエーションがある。それ故、生活の中でどのように何を摂取するのか、ということは文化・社会的な差異が顕著であり、しばしば社会学や文化研究のテーマとなってきた (Bourdieu 1979=1990: 281-306; Schivelbusch 1980=1988)。

本論は、こうした経口摂取を主とする様々な経験の中でも、特に嗜好品の経口摂取に注目したい。嗜好品とは広辞苑 (第六版) においては「【嗜好品】栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物。酒・茶・コーヒー・タバコの類」とされている。日本におけるその概念は、明治期にドイツ医学の輸入において上記にあるような栄養摂取を目的としない経口摂取品として紹介され、嗜好品を販売する者によって広く用いられてきた (團 2017)。

こうした嗜好品は様々な場面、場所で摂取されているが、本論では読書会におけるコーヒーやお茶の摂取に注目したい。ハーバーマスの公共圏の議論におけるコーヒーハウスの事例が著名なように (Habermas 1990=1994)、コーヒーを飲むことと議論の場の結びつきは古くからあり、現代においても議論の場においてコーヒーやお茶といった嗜好品の摂取はよく見られる。また喫茶店における読書会文化もある。嗜好品の摂取と読書会という二つの活動の結びつきが、活動の経験レベルでどのように達成されているのかを明らかにすることは、私たちの読書会をはじめとした議論における嗜好品摂取の機能の一端を明らかにするという点において重要なものとなる。

本論は、こうした読書会などの目的をもって取り組まれる活動の中でコーヒーやお茶といった嗜好品がどのように摂取されているのかについて、エスノメソドロジー・会話分析の立場からアプローチするものである。そもそも、飲むことと話すことは共に口を用いる活動である。それを文字通り同時に行おうとすれば、摂取した飲み物を、発話と共に吹き出すことになる。しかし、人はふつうそういうことをしない。また逆に嗜好品の摂取自体を避けて、議論のみを行うということも少ない。こうした場のあり方が文化的に、社会的にあるという時、そこには飲むことと議論することという二つ活動が問題なく進められ、かつその二つの活動が二つあるだけの意味があると考えられる。何らかの秩序だった解決がある。本論はこ

うした人々の方法を明らかにしたい。

つまりコーヒーやお茶をはじめとする嗜好品が議論の場において摂取されるということについて、相互行為の水準、活動の経験の水準から明らかにするものである。

2 先行研究の検討

こうした本論の問題関心は、エスノメソドロジー・会話分析の領域にも貢献しうるものである。読書会という活動と嗜好品摂取活動という二つの活動がどのように、相互に調整されながら人びとに経験されているのかを明らかにすることは、次のような課題に言い換えることができる。

一つには、ゴフマンの関与配分の規則の議論（Goffman 1963=1980）で示されている嗜好品摂取活動の特徴について、エスノメソドロジー・会話分析の立場から人びとの用いている方法を特定するかたちで貢献するというものだ。関与配分の規則の議論は、嗜好品摂取を相互行為として捉える極めて重要な指摘である。

ゴフマンは人々が行為や活動に注意を払ったり差し控えることを、「関与」という観点からとらえ、それを「支配的関与／従属的関与」と「主要関与／副次関与」という対から整理した。前者は、ある場面において期待される、規範とかかわる概念だ。支配的関与とは「個人に対して義務として課されるもので、社会的場面で個人はそれにすすんで関与せざるをえないものである」とされ、従属的関与とは「注意を支配的関与にそれほどはらわなくてもよい場合に、ある程度まで、しかもその間だけかかわることが許される関与である」とされている（Goffman 1963=1980: 49）。

後者は人々の活動への関与の割合の高低に関するものだ。主要関与とは、「ある個人の注意や関心の大部分を奪うものが主要関与であり、それは明らかにその時点で行為者のもっとも重要な決定因となるものである」とされ、副次的関与とは「主要関与を維持しながら、それを混乱させたりすることなく、それと並行してさり気なく続けることのできる行為である」とされる（Goffman 1963=1980: 49）。

関与配分の規則の整理は、嗜好品摂取活動の特殊性を示す際に有益である。コーヒーやお茶、たばこといった嗜好品摂取に関しては、摂取を目的とした場、喫茶店や喫煙所があり、それを目的とした時間（コーヒーブレイク）などがある一方、何かをしながら摂取されることもある。こうした相互行為としての嗜好品のあり方の特徴はゴフマンの議論によって光を当てられ、後に展開されている（相互行為儀礼に注目したたばこの事例としては Collins 2004）。

その中でも、特にエスノメソドロジー、会話分析の領域における展開は重要であり、本論はこの展開の一つに位置付けられる。それはゴフマンの関与配分の規則の議論で示された二組の区別をそのままデータに適用するようなものではなく、具体的なビデオ等のデータの分析を通して、関与配分のあり方自体が当該活動に参加する者たちにどのように相互行為として達成されているのかを明らかにする研究である。つまりある活動が支配的であるのか従属的であるのか、関与配分の在り方が主要的なのか副次的なのかが相互行為の中で示され、受け入れられ、維持され、調整され、覆されるといったその方法を明らかにするというものだ

(Mondada 2014)。

そこで特に重要な分析視座が、マルチアクティヴィティへの注目である。本論が注目するアクティヴィティは、読書会とそこでの嗜好品摂取活動だ。マルチアクティヴィティの研究は近年増えつつある。例えば、西阪 (2013) は福島における足湯ボランティアに注目する。足湯ボランティアにおける足湯のマッサージを、傾聴することとマッサージという二つの活動によって組織されたマルチアクティヴィティとして分析している。また、2014年には後述の Mondada (2014) が掲載されている Haddington ほか編 (2014) のマルチアクティヴィティに関する論文集も編まれている。

様々な飲食の事例を研究したのも蓄積されている。Mondada (2009) は、これまでは会話データとして扱われることの多かった夕食場面における会話を、食事をする 것과会話することというマルチアクティヴィの視座からとらえ直し、食事という活動と食事への評価の関係に注目して分析を行っている。また休憩時間でのカフェでのやりとりに注目し、休み時間を終えてカフェの席を発つ際の飲むことと会話や身振りに注目した Laurier (2008) などもマルチアクティヴィティの視座からの分析として重要なものだといえる。

こうした研究が蓄積される中、特に焦点をあてたいポイントの一つは Mondada (2014) で指摘されている、マルチアクティヴィティの時間秩序である。Mondada は、マルチアクティヴィティが組織される際、それぞれの活動が互いの進行にどうかかわっているかに注目している。対象は外科手術という活動と、それを他の専門家に見せるという活動だ。そして時間の秩序として、二つの活動が、それぞれの進行を阻害することなく組織される、「並行的な (parallel)」秩序、それぞれの活動がそれぞれの進行のスピード等の調整を必要とするような、それぞれの活動がそれぞれに「埋め込まれた (embedded)」秩序、そしてどちらかがどちらかの進行を阻害する「排他的な (exclusive)」秩序があることを指摘している (Mondada 2014)。

経口摂取を伴う活動の場合、嗜好品摂取が口を用いる活動である以上、摂取をする際は発話を行うことができない。場合によっては会話の進行を阻害するものとなる。それゆえに、二つの活動は相互に調整される必要がある。こうした活動の特徴を、人びとはどのようにしてうまく対処しているのか。この点は、嗜好品摂取活動を伴うマルチアクティヴィティを分析する上では重要な視点となりうる。なお、4章以降で分析を示すが、その多くは埋め込まれた時間秩序として組織されている。

以下では特に、読書会の議論における発話の順番交替の組織 (Sacks et al. 1974=2010) と嗜好品摂取活動の関係を見ていく。データはビデオデータである。ビデオデータは、発話のみならず様々な非言語資源も分析の対象となる。近年の研究では非言語資源が順番交替のシステムとかかわっていることが示唆されている。Goodwin (1984) は視線を聴き手に向ける時に、聴き手は視線を返すことが期待されることを指摘している。また、Mondada (2015) はさらに様々な身体的な資源、身振りや動き、移動などが発話順番構成単位の可能な完了点 (串田ほか 2017: 121-3) を示す機能を持つこと、また特に活動の中で用いているアイテムを置いたり、横に動かしたりすることで自らの順番の完了を予示する事例を提示している。モノを動かしたり、置いたりすることで、ある活動の進行、特に順番の単位の可能な完了点を示す

という現象は、嗜好品を手に取り、摂取し、元の位置に戻すといった嗜好品摂取活動を捉える上では極めて重要な指摘であろう。

3 データと分析の注目点

3-1 データ

本研究は、公益財団法人たばこ総合研究センターの研究として実施された「視聴覚データを用いた質的研究」として被調査者を募集し、実施したものである。本論で扱うデータはその中でも「課題のある活動（読書会等）」として被調査者に読書会をしてもらったところを撮影したものだ。当日は、ビデオ撮影およびプライバシー配慮についての説明を行い、同意を得た上で撮影している。調査実施日は2016年8月26日と9月16日である。

それぞれのケースは三名で実施した。座席の配置は、図1の通りとなっている。テーブルの上には、お茶、コーヒー、お菓子を置いており、自由に食べて良いということが伝えてある。カメラは、図のAとBが座っている辺の向い側に一台、Cの向かい側にハンディカムを置いて撮影している。

なお、本論で扱う読書会データは1時間40分と2時間2分、合計3時間42分である。それぞれのデータについては断片番号に撮影日時とデータ内の時間を表記している。参加者はすべて男性、20代である。また8月26日の事例では、AとBが初対面であり、Cが共通の知人である。9月16日の事例では、AとCが初対面であり、Bが共通の知人である。

読書会の形式や進行は、各被調査者グループにまかせた。8月26日の読書会の課題書籍はSudnow, David, 1978, *Ways of the Hand: the Organization of Improvised Conduct*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (=1993, 徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣訳『鍵盤を駆ける手——社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』新曜社。)、9月16日の読書会の課題書籍は太田肇, 2016, 『個人を幸福にしない日本の組織』新潮新書である。

座席配置は下図のとおり。
座席配置に合わせて、仮名化した。

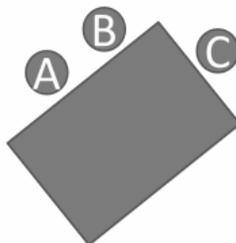


図1 座席配置について

また、以下の各分析では、分析の焦点となる行に合わせて、嗜好品摂取活動や視線、身振りなどの非言語的な要素を組み合わせたトランスクリプトを適宜提示していく。

トランスクリプトの記号は、「[」は重複（言葉の重なり）の開始。「=」は、つないだ部分が間隙なく発されていること。「(数字)」は数字の秒数の沈黙。「:」は、直前の音の引き延ば

しであり、記号の個数により引き延ばしの長さを表現している。「-」は直前の音が中断されたことを表している。「¥文字¥」は文字の箇所が笑いを帯びた発話になっていることを表現している。「.hh」は、ドットに続く h は吸気音を表している。「hh」は、呼気音を表している。

また、各行の表記として、左から行番号、アルファベットはその行為を行っている者を表している。非言語要素について、アルファベットの横の「摂取」という表記は、嗜好品摂取活動を表している。「視線」に関しては、視線を向けている対象と、その視線を向けている長さを、その記号で表現している。「身振」は、身振りや嗜好品とは関係のない身体の動きを表している。加えて、適宜線画処理した画像を加えている。

3-2 分析の注目点

以下では、読書会における発話の順番交替の組織と、嗜好品の摂取の関心に注目し、分析を進める。先述の通り読書会を進める上で重要なことの一つは、課題書籍についての議論である。意見を述べたり意見を聞くという行為は、読書会という活動を構成する重要なものとなる。一方何かを飲むことが、読書会の活動において焦点化されることは相対的に少ない。

食事において食べること、飲むことが支配的な関与を期待されるのに対し、読書会においてお茶やコーヒーを飲むことは支配的な関与を期待されるものではないことは、常識的に理解でき、これから検討していくデータにおいても、その参加者も相互行為の中でそのような関与のあり方を示していた。

読書会活動と嗜好品摂取活動というマルチアクティビティを経験する時、そこで参加者が解決しなければならないことは、この二つの活動が共に口を用いるものであり、話すことは飲みながらは基本的に行えない、ということだ。それ故に、議論における発話と、嗜好品摂取は、共に口を用いるという点において、そのタイミングを調整する必要が生じる。本論が明らかにしていくのは次の2点、一つは、この二つの活動がどのような時間秩序の下で、タイミングで組み立てられるのか。さらに、読書会の中で議論と摂取についての関与配分が、相互行為の中でどのように達成されているか。それぞれの方法である。

嗜好品にはお茶やコーヒーに限らず、たばこやお酒も含まれるが、本論は読書会という活動の中の嗜好品摂取に焦点をあてるため、読書会などで摂取されやすい、お茶やコーヒーを事例として注目した。たばこに関しては、参加者によって読書会でも許容される場合があると考えられるが、たばこはコーヒーやお茶のように口に含み飲み込むという摂取活動とは異なる摂取の流れを持っており、活動における相互行為的特徴も飲み物とは大きく異なるため、今回は事例として扱わない。

嗜好品摂取活動を行う際の重要な特徴として、摂取するためにコップに注がれたお茶やコーヒーといったモノが必要になる。つまり、嗜好品摂取活動を行うためには、テーブルに置かれたコップに手を伸ばし (i)、口元に運び (ii)、飲まなければならない (iii)。また、当然、テーブルには読書会のためのテキスト (書籍やタブレット端末) を操作するためにも、飲んだら、コップを口元からテーブルに運び (iv)、コップをテーブルに置く (v) 必要がある。こうした活動の流れ、(i) ~ (v) の行為の区別を踏まえると、(i) ~ (ii) の時は口がふさがっておらず発話することができる。また、(iv) ~ (v) も同様だ。ただ、(i) ~ (ii)

の行為は次の (iii) という実際に口をふさいで飲むという行為の準備になっており、後の分析で示すように、これから飲むことを示すものであり、発話の順番の構成単位がこれから完了することを予示する機能を果たしている。

身振りの準備の認識可能性が身振りの同期をもたらすことについて城・平本 (2015) が指摘したように、本論が示すのは嗜好品摂取の認識可能性 ((i) や (ii)) が参加者の読書会活動における議論や他の参加者の嗜好品摂取活動のタイミングに与える作用である。なお、議論を進める中で、上記の丸かっこの数字は、トランスクリプトの「摂取」行の数字と対応している。

次に、読書会という活動と嗜好品摂取活動というマルチアクティビティの時間秩序に注目するため、順番交替の組織の議論 (Sacks et al. 1974=2010) を踏まえ、発話の順番交替の組織と嗜好品の摂取のタイミングについて考えたい (図 2)。パターンとしては、嗜好品摂取の開始と終了を、(1) 自分の順番内に嗜好品摂取を開始し自分の順番内に終了する場合、(2) 自分の順番内に嗜好品摂取を開始し、他者の順番内に終了する場合。また、(3) 他者の順番内に嗜好品摂取を開始し、自分の順番内に嗜好品摂取を終了する場合。これは飲みながら発話することが難しいという身体構造から考えると一見できないように思えるが、先に整理した摂取活動の (i) や (ii) などのような摂取活動の一部は口をふさぐものではないため、発話を行うということはできる。そして (4) 他者の順番内に嗜好品摂取を開始し、他者の順番内に嗜好品摂取を終了する場合がある。また、順番交替の生じない、参加者が沈黙する中で嗜好品摂取を開始し終了する事例もありうるが、本論は順番交替との関係に注目するので扱わない (尚、事例としては 2 つ確認できた)。

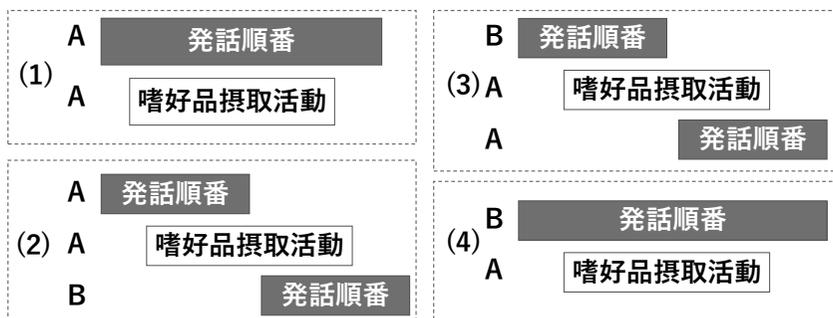


図 2 順番交代と嗜好品摂取活動の関係

まず、2つのデータにおける嗜好品摂取活動、経口摂取に至った回数は、全部で 116 回観察された (表 1)。順番交替との関係から整理した (1) ~ (4) の分類では (4) の他者の順番内で嗜好品摂取を開始し終了する事例が最も多いことがわかる。

一方で、(1) の自分の順番内で嗜好品摂取を開始し終了する事例は相対的に少なく、(3) の事例に関しては観察されなかった。

こうした事例の特徴から、「嗜好品摂取は自分の順番では摂取しない」ということをもたらす何らかの方法があるということが仮説的に考えられよう。嗜好品摂取は経口摂取を伴う活

表 1 各事例の数

	8月26日事例	9月16日事例	合計
(1) の事例	0	2	2
(2) の事例	0	12	12
(3) の事例	0	0	0
(4) の事例	41	61	102

動であり、経口摂取時には発話ができないことからこうした可能性がありうることは考えられる。だが、本論が示していきたいのは、そうした飲み物を口に含みながら発話することが難しいという身体の構造の問題以上に、二つの活動を調整することが相互行為の中で解決されるべき課題となっているということだ。

さらに言えば、「嗜好品摂取は自分の順番では摂取しない」ということが多く生じることは、(2)の「嗜好品摂取を自分の順番内で開始し、他者の順番内で終了する」という事例と一見すると矛盾するようにも思える。しかし、身体の構造の問題ではなく、相互行為を組み立てていく際の方法の問題として捉える時、(2)の事例もまた「自分の順番では嗜好品摂取しない」ことが多く生じることに寄与する手法である。このことも以下の分析で示す。

読書会という活動の中での嗜好品摂取活動をつぶさに分析する時、議論という活動への関与、嗜好品摂取活動への関与が、それぞれ参加者にとってどのような関与を向けるべきものなのか。嗜好品摂取が自分の順番内でなされることが避けられるという特徴を、こうした相互行為の側面から示したい。

4 分析

4-1 他者の順番内で嗜好品摂取を開始し、他者の順番内で嗜好品摂取を終了する事例

先述した通り、2つの読書会のデータの中で嗜好品摂取活動のタイミングとして最も多かったのは、他者の順番内で嗜好品摂取活動を開始し、他者の順番内で嗜好品摂取活動を終了する事例である。注目したいのは、読書会におけるコメントをすることと聞くことという活動と、嗜好品摂取活動というマルチアクティビティの時間秩序の関係だ。ここでは、まず特に順番の移行が適切な場ではない箇所での摂取の開始と終了の事例を見る。そして、次節では、順番の移行が適切な場で終了する事例を見る。

読書会によって参加者の議論やコメントの仕方、手続きは異なるだろうが、この読書会では事前に参加者がメモを作ってきており、Bはそのメモを見ながら自らの意見を述べている。おおよそ10分近くBはメモを読みながら、自らの書籍についての理解と意見を述べている。そのBのコメントの後半で、Cはお茶を飲む。そのタイミングに注目したい。

ここでCはBが「どうやって」とコメントする途中からコップに手を伸ばし、口元によせ、お茶を飲む。手を伸ばすタイミングは「つまり、自分」という接続詞とそのまとめの内容を聞きはじめた頃である。まだ順番の完了を予示するものはない。そこで、Cは嗜好品摂取活動を開始するのである。実際、2行目から3行目のBの発話は統語的にも未完結であり、宛先表現をAやCに宛てることもなく、順番の完了を予示するものはない。CはこうしたBのコメントをする間にお茶を飲むのである。

Cがお茶を口元に運び、飲み、コップをテーブルのものと位置に戻す時、コメントを述べているBはCに視線を向けた。AもCも視線を落としてテキストを見ながらコメントを聞いていたので、Cが飲む際に視線が上がったこのタイミングでCに視線を向けたのかもしれない。しかしCはBと目を合わせることはなかった。ただ、CはBから視線が向けられた後、反応機会場（西阪 2008）において小さく聞いていることを示すような相槌をうっている。Bから視線を向けられる時、Cは摂取活動を終え、コップをテーブルに戻し、摂取の前にとっていた読みながら聴くという状態に戻るタイミングだった。

つまり、Cはあくまで、タブレット端末のテキストと向き合いながら聴いていることをし続ける中で、挿入的に嗜好品を摂取するというフレームを維持している。少なくとも視線や身体の向きは、そのような参与枠組みを維持している（西阪 1992）。

この断片においてCは明確にテキストを見ながらコメントを聞くという枠組みを維持しながら、相手の話を聞きつつ嗜好品を摂取していた。他の事例としては、コメントを述べる話し手の視線に対して、自らの視線も合わせつつ、聴き手として相槌を打ちつつ、嗜好品を摂取する事例もあった（8月26日の事例においては8つ、9月16日の事例においては7つ）。このような事例も、話し手が自らのコメントをある程度のボリュームを持って語る中など、順番が自らに宛てられる可能性が低い中でなされていたことは共通点だといえる。

このようなタイミングで嗜好品を摂取することは、少なくとも参加者は読書会の議論の展開として発話するタイミングと嗜好品摂取のタイミングとがぶつからないような工夫となっている。

4-2 他者の順番内、特に順番の移行が適切な場で嗜好品摂取を終了する事例

これから見る断片2も前節でみた嗜好品摂取活動の終了の事例である。しかし、終了のタイミングが順番の移行が適切な場でなされている点が異なる。前節の事例は、自分の順番になる可能性が低い故に、聴き手という枠組みで聴きながら飲む事例だった。一方で、順番の移行が適切な場にある時、嗜好品摂取活動の終了のタイミングはどう組織されているのか。順番交替の組織と摂取活動が調整されず独立の関係であれば、(3)の事例が生じてもよさそうだが、結論からいえば(4)の事例、つまりは他者の順番内で嗜好品摂取が終了されることが多く観察される。そこには順番交替と嗜好品摂取の調整がなされており、嗜好品摂取活動をやめることが、次の順番を産出するものであることを示す機能を、次の順番を自分が産出することへの志向を示す機能を持つものだった。その際の方法を見たい。

断片1とは異なる9月16日に実施された読書会のデータだ。開始から1時間15分が過ぎ、読書会は後半になり、読んできたテキストについてコメントをしている。この読書会の

特徴は先の8月の事例とは異なり、各自でコメントを準備しているのではなく、各自が読んできて、その場で議論すべきトピックを選択した上で、自由に議論をしている点だ。

ここで注目したいのは、Cが課題図書に対するコメントをした後のやり取りの中での嗜好品摂取活動のタイミング、特に摂取活動の終了の組織の仕方だ。

大まかに、Cのコメント以降の流れを紹介する。まず、Cのコメントは、課題図書において採用選抜と美少女コンテストが比較されていることについて、この比較がずれているというものだった。このコメントに対し、AとBが相槌をして同意をした後、2秒の沈黙が生じた。沈黙の後、Aは「あると思いますよ」と、「うん」以上の具体的な同意を言葉にする(5行目)。ここでAが次の順番を産出したことになる。そしてさらに、その後でBが6行目のように「昇進の選抜みたいのとは近い可能性がある」と、Cがコメントで述べた「ずれ」に関する例示をし(6行目)、自己修復を行っている(7行目)(Schegloff et al. 1977=2010)。そして、このBの主張にCは同意するのである(8行目)。

【断片2】20160916 01:17:15

05A: (それは)あると思いますよ

06B: 昇進-昇進の選抜みたいのとは近いって可能性がある。

07B: ていうk. ま-まだ[まだ近いかもしれ[ない。

08C: [うん [そうですね。

では、嗜好品摂取活動の組織の仕方、特に終了の仕方について確認したい。まず、開始について簡単に踏まえておくと、Cは6行目のBの発話のタイミングでコップに手を伸ばしている。つまり、嗜好品摂取の開始は他者の順番内で開始されている。Cは6行目の冒頭からコップに手を伸ばし、二回目の「昇進」という発話の箇所でコップを口元に引き寄せる。そして、Bの発話の「可能性がある」というところで飲み始めている。

そして、終了に向かっていく。ここに注目したい。

07B 発話: ていうk. ま-まだ[(0.5)まだ近い]かもしれ[れない。

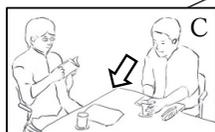
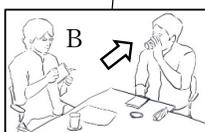
07B 身振: めくる

07B 視線: CCCC

08C 発話: [うん [そうですね。

08C 視線: BBBBBBBBBBBBBBBBCCCCCCCCCCCCBBB(※Cはコーヒーの入ったコップのこと)

08C 摂取: iii iii iii iii iii iii iii [iv iv iv iv iv]v



07行目のBの発話はCの感想に端を発するものであるが故、Bは本をめくりながら、一瞬、「まだ」という発話のタイミングで、Cに視線を向けている。BはCの意見に対する自らの意見を、視線をCに向けながら発する。つまり、7行目の発話内容自体、Cのコメントに向けられたものである。そういう意味で、BのCのコメントに対する感想について、Cは何らかの応答を求めるものとして聞くことができるだろう。実際、視線を向けられてすぐに、Cはコップを口元から離して相槌を打ち、感想への賛同を行っている。

また、Bの7行目の発話は、6行目のCのコメントに対する自分の意見に対し「ていうk(か)」と、自己修復の開始を行い(Schegloff et al. 1977=2010)、「可能性がある」から、「かもしれない」とよりCのコメントに寄り添った意見に修復している。この7行目のBの発話は自己修復を行っているという点からも、その修復の完了と共に、可能な完了点が生じうることは予期できるものである。

実際、既にBに視線を向けながらコーヒーを飲んでいたCは、BがCに視線を向けるタイミングでコップを戻しはじめる。そして、発話末でのオーバーラップ(串田ほか2017: 136)というかたちで、コーヒーを飲みながら、口がふさがっていても発話することのできない「そうですね」という具体的な発話を伴う同意を示すのである。

ここでのCの嗜好品摂取もまた、順番交替の組織とコーヒーを飲むことの調整が極めて繊細に組み立てられていることがわかる。Bの意見を聞き、Bの視線を受けた時に、Cは同意の応答を示すために、適切にコーヒーを飲むことをやめ、応答をしている。つまり、Cは摂取の終了を組織することで、Bの意見の聴き手として、意見へのはっきりとした応答を示すのである。可能性としては嗜好品摂取活動を続けながら簡潔な同意を与えるだけという聞き方もあっただろう。しかし、自分が次の話し手になる可能性に指向してBが嗜好品摂取活動を終了させた結果、(3)の事例にはならなかった。ここで見てきた事例は、発話の順番と摂取の終了の調整を通して、意見することとその受け止めという議論に内在する行為連鎖を支配的なものとして組織するものだったといえる。

4-3 自分の順番内で嗜好品摂取を開始し、他者の順番内で終了する事例

4-3-1 摂取の開始が自分の順番の終了を予示する方法

もう一つ、表1にまとめた中で数多く確認された、自分の順番内で嗜好品摂取活動を開始し、他者の順番内で終了するという(2)の事例を見たい。

先にも述べたように、何かを飲むということは、口をふさぐということであり、口を開いた発音は難しくなる。(2)の事例は、3-2で見てきたよう、「自分の順番では嗜好品摂取をしない」ことが多く生じるということから逸脱しているようにも見える。しかし、そうではない。

嗜好品摂取活動の段階として、コップに手を伸ばし口元に寄せることは、発話を行いながらも遂行することができる。本節で示すことは、このような摂取活動を構成するコップを取ること、口元に寄せることは、これから生じる「飲む」ことによって発話が難しくなることを示し、それが自分の発話の順番を終了すること予示する機能を持っているということだ。そして、こうした方法は、自分の順番内で嗜好品摂取をしないということが多く観察されることをもたらす一つの方法になっているのである。

ここで見ていく事例は、いずれも9月16日に実施された読書会で観察されたものである。事例の一つ目は、読書会がはじまってから7分がたった頃、AとCの共通の知人であるBがこの読書会の課題書籍についての説明を軽く行ったうえで、自己紹介活動に入ろうとしたところだ。以下の断片で省略している1行目から4行目はBがこの書籍を自分が選んだ理由を述べている。5行目でもその理由についての語り続けているが、6行目でその語りを後で話

すものとして、自己紹介をはじめようとしている。

【断片 3】 20160916 00:07:31

05B ¥自分が思いまして¥. ()

06B この本を選んだ理由はちょっと後で話すのでちょっと先に

07B 自己紹介的な

08C はい. (以下、省略)

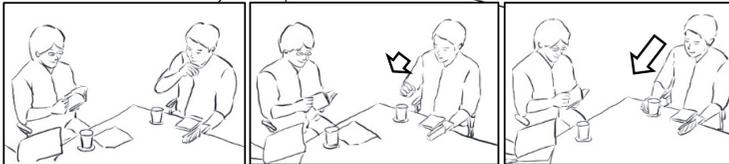
発話のみのトランスクリプトを観ると、Bは6行目から8行目にかけての「ちょっと先に」「自己紹介的な」という統語的には完全でない発話を行っているが、この後分析するように、BはCに手ぶりなどを用いて自己紹介を促し、Cは自己紹介を行った。

この短い断片の中に嗜好品摂取活動は二度観察される。一つはCによるもの、これは4-1の他者の順番内で嗜好品摂取活動を開始し、終了する(4)の事例だ。もう一つがBによるもので、嗜好品摂取開始は自らの発話の順番内で開始され相手の順番内で摂取を終了する(2)の事例になる。

まず(4)の事例であるCの摂取を確認したい。01行目から04行目にかけて、Bは自分が選んだ本を手に取り、ぱらぱらとページをめくり、めくるページを眺めながら選定の理由を述べている。05行目でBはめくっていた本を閉じ、06行目の発話と連動して、閉じた本をテーブルに置く。

05B 発話: ¥自分が思いま[して¥. ()

05C 摂取: [i i i i ii ii

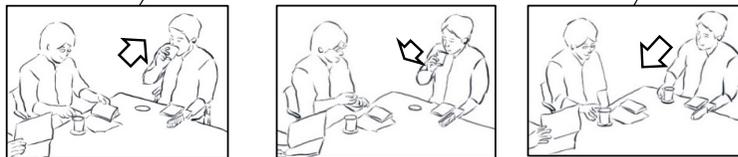


06B 発話: この本を選んだ理[由はちょっと後[で[話[すの[で[ち[よ[つと[先[に

06B 身振:

06B 視線:

[C [C [CCC [I
[C [C [CCC



06C 摂取: ii ii ii ii ii ii ii [iii iii iii iii iii iii iii [iv iv iv v v v v v

06C 視線:

[BBB

省略されている04行目までのBの発話は課題書籍の選定理由であり、05行目はそうした選定理由の語りの一部を選定者であるBが説明しているものとして聞くことができる。しかもこの発話はBの簡単な感想の後に、書籍選定の理由が語られ始めたばかりということもありCはこのタイミングで嗜好品摂取活動を開始している。

しかしBはここで思わぬ展開を見せる。6行目の発話において、「この本を選んだ理由はちょっと後で話す」と、つまりはここでの選定理由についての説明は中断され、活動の軌道は変わるのだ。6行目の「本を選んだ理由は」のところBは5行目には左手に持っていた課

題書籍をテーブルに置き、「ちょっと後で」のあとにBは視線をCに向ける。CもまたBに視線を向けた (Goodwin 1984)。そして、同時にBは手ぶりでCに促すような動きをしている。こうしたBの視線や手ぶりで、CはBに視線を向けながら、嗜好品摂取を終了している。

Bの発話における「ちょっと後で」という発話とその直後のCへの視線や手ぶりは、これまでのBによる課題図書を選定理由の説明という活動が切り替わり、Bの続く発話がCに向けられたものであることを予期することができる。こうした中でCは、素早く嗜好品摂取活動を完了に向かわせているのだ。コーヒーを飲んでいたCはBの視線と手の動きを見ると、すぐにコーヒーを口元から離し (iv)、テーブルに置いている (v)。

そして、この会話の流れの中でBによって嗜好品摂取活動が組織されている。ここで重要な点は、6行目のBの順番で、CはBの続く順番が自らに向けられるものだということが予期できるが、7行目で具体的にBがCに何をしているのかである。

06行目の最後、「ちょっと先に」の「に」のタイミング、BがCを指した後、Bはコーヒーの入った紙コップをつかんでいた。



そして7行目で、「自己紹介的な」という発話と同時に、コップを口元に寄せ、発話が終わると共にコーヒーを飲み終えるのである。7行目の発話は、統語的には完結していない。しかし、6行目のBの活動の軌道変更、そして変更先の可能性としてのCへの視線や手ぶり、その後に来る、7行目の「自己紹介的な」という一連の流れは、Cへの自己紹介の促しを理解可能なものとしている。そして、何よりBの7行目の発話はBが嗜好品摂取活動を同時に進めることで、少なくともBはこれから発話できなくなるという点で、Bの順番の完了点を予示している。6行目のBの行為は少なくとも、Aに向けられたものではなかったため、自己紹介の促しがBからCになされていると理解可能なのである。

また、補足的ではあるが、6行目のBの自己紹介の促しを行う際の、Bが手に持っているアイテムの移行は興味深い事例だといえる。Mondada (2015) は、ある順番において用いられているモノが手放されたり、活動の焦点となっているところから移される際に、そのモノを動かすという非言語的な資源によって完了可能点を示すことを指摘しているが、5行目でBがめくっていた本を6行目で一度テーブルに置くこと、さらにいえばその後コップを手取ることも、そうした順番を構成する単位の可能な完了点を予示する事例となっている。こうした中で、先述したようなBの発話や視線、手ぶりからなるCへの自己紹介の促しがなされていた。

4-3-2 摂取のタイミングが他者の順番の産出に合わせて調整される事例

もう一つ、(2)の事例をみたい。この事例は自分の順番内で嗜好品摂取を開始するが、次の順番にうまく移行できない事例だ。(2)の事例が、発話の順番交替に、自分の順番の終了

の予示という点で寄与していることを先に見たが、この事例は嗜好品摂取のタイミングが他者の順番の産出をめぐるトラブルに配慮するかたちでデザインされている。この点からも、(2) の事例が、順番交替の組織に合わせて、つまり順番交替がトラブルなくなされることが支配的関与を期待されるものとなるよう調整されていることを示している。

【断片 4】 20160916 1:02:15

01B 発話: 営業何年かやってる人が、就活生にあって、

02B 発話: こいついけるな、とかいけないな、とかが[わかるかっていう

02B 摂取:

02B 視線:

[i i i i i i i i

[AAAAAAAAAAAAAAAA



ここでは、B が A に対してコメントを求めている。議論において就職活動の中で人事は就活生を見て、適切な部署に配属することができるのか、特に営業に向いているということを判断できるのか、という話題になり、B はかつて営業職経験のある A に話題を振っている。話題の内容からも、この B の発話が A に向けられていることは明確なのだが、その中で B は「わかるかっていう」というところで嗜好品摂取活動を開始している。

先にみたように、これから B が飲むことは口がふさがれることを予示し、それは順番の完了を予示する。さらにここでは B が発話の内容として A を営業経験者というカテゴリー（串田ほか 2017: 278）のもとに組織されており、発話が A に向けられていることがわかる。こうした行為のデザインは先に見たように、B が A に質問をし、かつ嗜好品摂取活動を介することで自らの順番を終えようとしていることを視覚的にも示している。

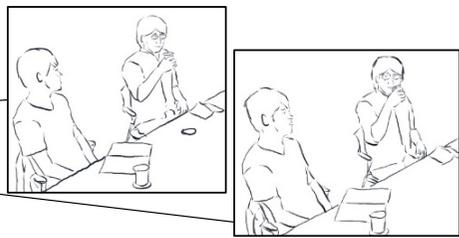
03B 発話: (ん) .hhh

03B 摂取: ii ii ii ii ii

03B 視線: FFFFFFFAAAA



04B 発話: (1.5) それは微妙?
 04B 摂取: ii ii ii ii ii ii ii iii
 04B 視線: FFFFFFFFFFFFFFFFFF AAAA



05A 発話: いや、正直さ [(1.0) 営業って誰[が]売れるかわからないんだよね。
 05B 摂取: iii iii iii iii iii [iv iv iv iv iv iv iv [v v v v v v v v v v v v v v v v
 05B 視線: FFFFFFFFFFFFFF [AAAAAAAAAAAAACCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC



しかし、注目すべきはコーヒーの入ったコップに手を伸ばしながらも B がすぐに飲み始めない点だ。2 行目の発話の後、B は小さく声を出した。その頃には引き寄せたコップは口元に近づいている。しかし A は首を傾げ、次の順番となる発話を行わない。考えることをしている。B は A が首を傾げる様子を見ながら、口元に十分近づいたコーヒーを飲むことなく、沈黙する。4 行目の摂取の行の (ii) の下線部は口元にコーヒーをとどめている箇所である。さらに 1.5 秒ほど沈黙が続くが、次の順番を宛てられている A は B の問いに対し答えない。B は A の沈黙の後に、先の問いへの回答に対する遅延から、非優先的な回答になっていることを想定した質問の形式で問い直し (Sacks 1987)、十分に口に近づけていたコーヒーを飲み始め (iii)、あらためて A に視線を向けるのである。

B の嗜好品摂取の開始は、3 行目から 4 行目にかけてかなり滞っていた。これは A の発話産出の遅延と深くかかわっていることが重要である。つまり、B はこの嗜好品摂取活動の進行 (つまりは飲むこと) が滞ること以上に、自らの産出した問いと A の回答の産出の困難という、読書会というアクティビティに属する相互行為の進行に繊細なタイミングで行為を組織しているのだ。

断片 3 の C への自己紹介の促しの事例は、C の嗜好品摂取の完了へと向かう様子や、その促しという行為の特性上、次の促しの対象となった C の行為を待てば良いため、A はすぐに嗜好品摂取活動を開始していた。しかし、この事例は B の問いに対する A の回答産出上のトラブルを観察する中で、そのトラブルへの対処可能性を残すべく、嗜好品摂取活動の開始を止めているのである。

これもまた、読書会活動と嗜好品摂取活動という二つの活動のいずれが支配的であるのか、従属的であるのかを相互行為として遂行している。B の嗜好品摂取活動が B の順番内で開始され、断片 3 のように止まることなく飲み始めていたら、4 行目の発話、応答の追及を行うことはできていなかった。しかし、実際は嗜好品摂取活動の進行は (ii) で止まったのだ。摂取活動の (i) ~ (ii) で、自らの順番が終了することを予示しながらも、A の順番の産出の状態についての把握の上で、摂取活動は調整されている。そこで摂取活動は一時停止していた。だが、こうした相互行為において、他者の順番の産出を見ながら、自分の摂取活動の調整を通して、読書会における議論が支配的関与を期待されるものとして組織され、嗜好品摂

取活動は従属的関与を期待されるものとして組織されているのである。

5 結語

以上、4章において4つの断片の分析を通して、読書会における発話の順番交替と嗜好品摂取の活動のタイミングを見てきた。体系的に観察される参加者の方法として、自分の順番で嗜好品摂取をしないというものがあった。

4-1 でみた (4) の事例も 4-3 でみた (2) の事例も嗜好品摂取の終了のタイミングを他者の順番内で行っている。これは、4-2 の断片 2 や、4-3 の断片 3 の前半の事例のような、相手の順番内で終了する方法がとられていることからわかる。これは、次の順番が自分に宛てられていたりする時に、次の順番を産出するための準備に志向していること、つまり読書会活動への支配的関与を相互行為の中でもたらすものだった。

また、4-3 で見てきた、断片 3 の後半の事例や断片 4 の事例は、嗜好品摂取活動を開始することで自らの順番の完了を予示する機能があることを示すものだった。また、自分の順番内で嗜好品摂取を開始しながらも、摂取活動の調整は、順番交替の進行のトラブル等に配慮したかたちでなされている。断片 4 の事例のように摂取の開始は完了を予示しながらも、あくまで他者の順番産出へのトラブルに対応可能なかたちで摂取のタイミングは組み立てられていた。あくまで参加者は、読書会を組み立てる議論、その順番交替のあり方に合わせて、調整するかたちで嗜好品摂取活動を組み立てていた。つまり、参加者は相互行為として、読書会という議論の組み立てに支配的に関与し、嗜好品摂取活動をまさに従属的な関与を期待されるものとして組織していた。本論が示した分析は、そのような方法であった。

コーヒーハウスの事例があるように、私たちの社会において様々な議論の場においてしばしば嗜好品は摂取されている。それは、嗜好品を飲むためのものではなく、議論をする中での従属的なものとして摂取されている。しかし、飲むことと話すことという口を用いる活動において、この二つの関係はいかに問題なく、組み立てられているのか。本論は、読書会における議論という活動と嗜好品摂取という活動、この二つの活動がいかなる時間秩序の中で組み立てられているのかを、エスノメソドロジー、相互行為分析の立場から明らかにしてきた。

こうした嗜好品の摂取活動と議論の組織の方法は、読書会における嗜好品摂取の意味の一端を示すものである。

付記

本研究は公益財団法人たばこ総合研究センターの研究として実施された「視聴覚データを用いた質的研究」の成果の一部である。

文献

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La distinction: Critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit.
(= 1990, 石井洋二郎訳『ディスタクシオン——社会的判断力批判 1』藤原書店。)
Collins, Randall, 2004, *Interaction Ritual Chains*, New Jersey: Princeton University Press.

- 團康晃, 2017, 「『嗜好品』が『趣味』と結びつくとき——明治期における衛生学および勸業, PR 誌のテキスト実践を事例に」『年報社会学論集』(30): 75–86.
- Goffman, Erving, 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, Glencoe: Free Press. (= 1980, 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房.)
- Goodwin, Charles, 1984, “Notes on Story Structure and the Organization of Participation,” Max Atkinson and John Heritage eds., *Structures of Social Action*, Cambridge: Cambridge University Press, 225–46.
- Habermas, Jürgen, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求 第2版』未来社.)
- 城綾実・平本毅, 2015, 「認識可能な身振りの準備と身振りの同期」『社会言語科学』17(2): 40–55.
- 串田秀也・平本毅・林誠, 2017, 『会話分析入門』, 勁草書房.
- Laurier, Eric, 2008, “Drinking Up Endings: Conversational Resources of the Café,” *Language & Communication*, 28: 165–81.
- Mondada, Lorenza, 2009, “The Methodical Organization of Talking and Eating: Assessments in Dinner Conversations,” *Food Quality and Preference*, 20(8): 558–71.
- , 2014, “The Temporal Orders of Multiactivity: Operating and Demonstrating in the Surgical Theatre,” Pentti Haddington, Tiina Keisanen, Lorenza Mondada, and Maurice Nevile eds., *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 33–76.
- , 2015, “Multimodal Completions,” Arnulf Deppermann and Susanne Günthner eds., *Temporality in Interaction*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 267–308.
- 西阪仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』43(1): 58–73.
- , 2008, 「発言順番内において分散する文——相互行為の焦点としての反応機会場」『社会言語科学』10(2): 83–95.
- , 2013, 「二つで一つ——複合活動としての足湯活動」『共感の技法』勁草書房.
- Sacks, Harvey, 1987, “On the Preference for Agreement and Contiguity in Sequences in Conversation,” Graham Button and John R. E. Lee eds., *Talk and Social organization*, Clevedon: Multilingual Matters Ltd, 54–69.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson, 1974, “A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation,” *Language*, 50(4): 696–735. (= 2010, 西阪仰訳, 「会話のための順番交替の組織——もっとも単純な体系的記述」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社, 7–153.)
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson and Harvey Sacks, 1977, “The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation,” *Language*, 53(2): 361–382. (= 2010, 西阪

仰訳, 「会話における修復の組織——自己訂正の優先性」『会話分析基本論集——順番交替と修復の組織』世界思想社, 157-246.)

Schivelbusch, Wolfgang, 1980, *Das Paradies, der Geschmack und die Vernunft*, München: Carl Hanser Verlag. (= 1988, 福本義憲訳, 『楽園・味覚・理性——嗜好品の歴史』法政大学出版社.)

(だん やすあき、大阪経済大学、dan@osaka-ue.ac.jp)
(査読者 小宮友根、平本毅)

An Interaction Analysis of Talk with Oral Consumption: From a Viewpoint of Multi-activity

DAN, Yasuaki

This paper aims to analytically explain the intake of articles of taste in relation to the setting of a book-talk or reading circle from a multi-activity viewpoint, with a particular focus on the progression of discussion between patrons during their consumption of beverages such as tea and coffee; currently a topic of interest in ethnomethodology and conversation analysis. Therein, a certain few methods of such drink consumption were observed to prevent the hindrance of discussion from going forward. First, the consumption of tea or coffee is supposed to take place within the other's turn at speaking. Second, the action of the speaker starting to drink during their own turn functions as a signal to the other that it is the completion of this turn.